

目次

はしがき……………松尾 聰……………一

研究篇

心の鬼と身内の蛇——『蜻蛉日記』独詠歌の世界——……………野口元大……………七

清少納言の「四季」意識……………田中新一……………三五

物語の廻廊——色好み譚——……………久下裕利……………六〇

空蟬の人物造型……………三角洋一……………六五

『源氏物語』方法の一端……………八 畷 正 治……………七二

——「紅葉賀」「花宴」から「須磨」「明石」へ——

総角の巻について……………石田 穰 二……………八二

源氏物語の「髪」へのまなざし……………吉井美弥子……………一〇〇

光源氏の道心と愛執 …………… 鈴木日出男……………三五

源氏物語の文体生成——平安仮名文学史の中で—— …………… 中川正美……………三五

源氏物語の古筆切 二題 …………… 高田信敬……………二六五

資料篇

別本「漣標」卷写本の出現 …………… 池田利夫……………三三

——鶴見大学図書館新収本とその翻印——

研究篇

天禄二年、正月以来夫のうちしきる前渡りに曠患の炎を燃やし尽くした道綱母は、その苦患から逃るべく、父の許に身を避け、四月初めから長精進を始める。その際の心願は、もはやこの世に絶望したので、一日も早く出家の素志を叶えさせたまえというのであったが、最初さまで切迫した思いに駆られるというほどでもなかったのに、いつしかのめり込むように勤行に熱中してゆく。そうした高潮した感情の中で、

二十日ばかり行ひたる夢に、わが頭をとりおろして額を分くと見る。悪し善しもえ知らず。七八日ばかりありて、わが腹のうちなる蛇ありきて、肝を食む、これを治せむやうは、面に水を沃るべきと見る。これも悪し善しも知らねど、かく記しおくやうは、かかる身の果てを見聞かむ人、夢をも仏をも、用ゐるべしや、用ゐるまじやと、定めよとなり。

(二三九頁)^(注1)

『蜻蛉日記』の中でも最も有名な箇所の一つである。

第一の夢は、出家の望みが叶えられたというのであろう。「頭をとりおろして」というのは、諸注「頭をおろして」と同じと見て、髪を切る、落飾の事としているが、そういう普通のことであれば、それに続いて、「悪し善しもえ知らず」という言葉が出て来るものであろうか。「え知らず」については、物忌み中なので夢解きの専門家に依頼することができなかつたから、あるいは単に「知らず」を強めただけか、とする『全注釈』^(注2)よりも、あえて夢判断することが恐ろしかったのではないかとする『注解』^(注3)の読みを採りたい。しかしそれにしても、第二の夢までを含めればとにかく、この夢だけでなぜそんなに畏怖感をことさらに言わなければならなかつたのであろうか。

落飾の意味でなら、通常「頭をおろす」と言い、「取り下ろす」とする用例を知らない。この表現は、「え知らず」の畏怖感を併せ考えるならば、自分で自分の頭を頸から外して取り下ろし、尼姿に整えたことを言っているのではないで